

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 マダイ

学名 *Pagrus major*

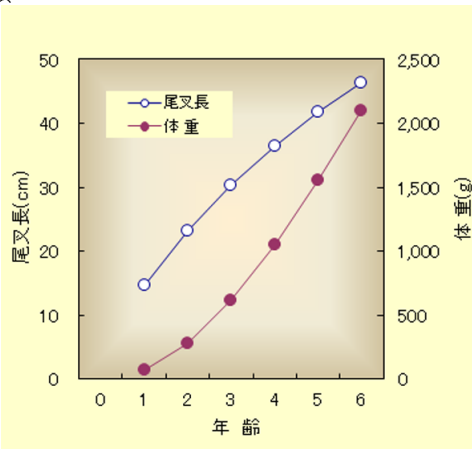
系群名 瀬戸内海東部系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 15～20歳
成熟開始年齢: 3歳(50%)、4歳以上(100%)
産卵期・産卵場: 紀伊水道、大阪湾、播磨灘では4月中旬～5月上旬、備讃瀬戸では5月中旬～6月中旬。産卵適地は水深30～70mの砂質底で、産卵適水温は16.5～21.5℃
索餌期・索餌場: 体長約10cmの幼魚期までは産卵場に近い育成場、その後成長に伴い紀伊水道、大阪湾、播磨灘、備讃瀬戸に分布が広がる
食性: 甲殻類、多毛類、尾虫類、魚類
捕食者: 稚幼魚期に魚食性魚類

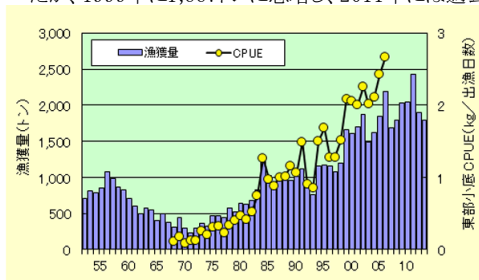


漁業の特徴

瀬戸内海東部海域におけるマダイは古くから「明石鯛」として全国にその名を知られている。1925年以前は、主に一本釣り、吾智網、しばり網などによって大型サイズのを漁獲していたが、1960年代には、主に小型底びき網、吾智網、釣、刺網、小型定置網によって小型魚が漁獲されるようになった。種苗放流、養殖も盛んに行われている。瀬戸内海漁業取締規則は毎年7月1日～9月30日の3カ月間、全長12cm以下のマダイの採捕を禁じている。

漁獲の動向

瀬戸内海東部系群のマダイ漁獲量は1956年の1,076トンから減少傾向が続き、1971年には過去最低の234トンまで低下した。その後1984年までに1,219トンに回復した。1986～1998年の漁獲量は754～1,196トンでほぼ安定していたが、1999年に1,667トンに急増し、2011年には過去最高の2,432トンとなった。2013年は1,797トンであった。

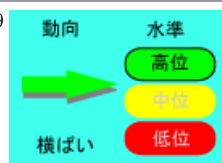


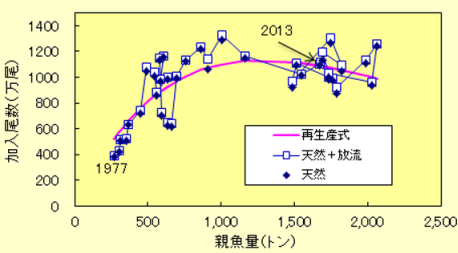
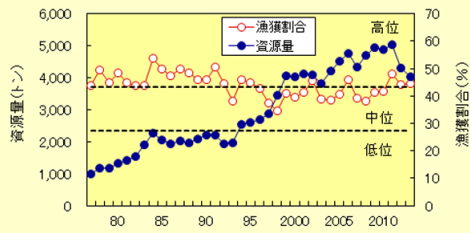
資源評価法

1977年以降の年別年齢別漁獲尾数の推定結果を基に、Popeの近似式を用いたコホート解析により年齢別資源尾数と漁獲係数(F)を推定した。最高齢(6歳以上)のFについては5歳のFと同じ値とした。2013年の1～5歳魚のFは、各年齢の過去3年間のFの平均とし、6歳魚以上のFは5歳魚のFと等しくなるように探索的に求めた。ただし、2013年の0歳魚資源量は、再生産曲線に親魚量を代入して求めた。

資源状態

資源量は1977年以降増加傾向が続き、1984年に2,267トンまで増加した。1992年に1,919トンまで低下したものの、1994年以降急増し、2011年には過去最高の5,048トンとなった。2013年は4,026トンと推定された。親魚量は1,681トンで、再生産関係から求めたBlimit(298トン)を大きく越えている。現状の漁獲係数(1.05)は、F30%SPR等の推奨値と比較すると漁獲圧が高い状態である。また、加入量当たり漁獲量で見ると漁獲係数が高く成長乱獲の状態である。しかし、努力量の低下により親魚量と加入量が増加した経過を考慮すると、現状の漁獲圧が高すぎるとは考えられない。





管理方策

現在得られているリッカー型の再生産関係(種苗放流による添加分を含む)をもとにして、最大持続漁獲量を実現する資源管理目標(Fmsy)を設定した。なお、放流尾数を70.4万尾(2008～2012年の平均値)とし、0歳時の添加効率を0.44(2008～2012年の平均値)と仮定している。再生産関係から判断して現在の親魚量は加入量の急激な低下をもたらす状態ではないので、最大持続生産量を達成するF(Fmsy)をFlimitとしてABCを算定した。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	1,591ト／	Fmsy	0.93	41%
ABCtarget	1,352ト／	0.8Fmsy	0.74	35%

- 漁獲割合＝ABC／資源量
- F値は1歳魚の値

資源評価のまとめ

- 資源水準は高位、動向は横ばい
- 資源量は1977年以降増加傾向が続いた
- 現状の親魚量はBlimitを大きく越えている
- 現状の漁獲係数は推奨値より高いが、依然として資源は高水準であり、現状の漁獲圧が高すぎるとは考えられない

管理方策のまとめ

- リッカー型の再生産関係を仮定し、さらに放流尾数を70.4万尾(2008～2012年の平均値)とし、添加効率を0.44(2008～2012年の平均値)と仮定した場合の最大持続漁獲量を実現するF(Fmsy)を用いてABCを算定した

執筆者: 阪地英男・山本圭介

資源評価は毎年更新されます。